

『平成25年度 指導部の目標と9人制の重点指導項目』

J V A国内事業本部 審判規則委員会 指導部

1 目 標

- (1) 公正・公平な立場で、ルールを正確に適用し、ラリーの継続を大切にして、観衆・マスメディアを魅了するようなダイナミックなプレーを引き出す審判実践を行う。
- (2) 審判員は、役員、競技参加者に対する言動に十分注意し、相互の信頼関係を築く。
- (3) 審判技術の向上を目指すために日々の研鑽に努める。
- (4) 技術統計については、より正確な判定とデータ作成を行うことができるようなスタッフのスキルアップを図る。

2 重点指導項目

【主 審】

I 権限と責務

第27条第1項権限、第2項責務を十分理解し、**試合全体をコントロールする**。特に下記の項目については、毅然とした態度で臨む。

- (1) チームメンバーによる不法な行為（相手に向かって“ガッツポーズ”などで挑発・威嚇する行為など）に対して、第25条「不法な行為」に則って罰則を適用する。また、審判団（副審・線審等）に、チームから判定に対するクレームがあった場合は、その内容を確認し、適切に対応する。
- (2) 判定に対する質問は、ゲームキャプテンのみであるので、監督や他の競技者からの質問は受けつけない。

II 判定について

- (1) ネット際の判定
 - ① タッチネットの判定
タッチネットの判定は、副審に頼るのではなく、主審が見える範囲は判定しなければならない。
 - ② オーバーネットの判定
ブロッカーとボールの接点を確実に見て判定をする。（オーバーネットの反則が起きる接点に視点を置く。）特に主審側で、オーバーネットをしていない状態で反則をとる場合がある。
ブロック後のフォローの手がオーバーネットしても反則ではない。
 - ③ ブロック行為なのか、そうでないのかを判定をする。（ブロック後優位なプレーにならないようにする）ブロック行為でない場合、同一競技者が続けてプレーすることはドリブルの反則になる。他の競技者がプレーした場合もハンドリングにバラツキがあるとドリブルの反則になる。
 - ④ **ブロック後の接触回数を正確に判定する。（1人が連続して3回プレーするなど）**
 - ⑤ ネットプレーの際にインターフェアの反則がないかを意識しながら判定する。相手プレーヤーの行為がネットプレーの妨げになるケースはインターフェアの反則である。
- (2) ハンドリング基準
 - ① 2回目・3回目のハンドリング基準を確立させる。ボールと身体が接触する瞬間を良く見て判定する。
 - ② ネットプレーの判定で「ボールを掴んで（両手でボールを止めてネットに当てる。または、片方の手でボールを投げる様なケース）ネットプレーをする」ときのホールディングや「ネットプレーの後のオーバーパス」などがホールディングやドリブルになることがあるので注視する。
 - ③ ブロック後の吸い込みボールを上げるプレーは形にとらわれず、ボールが身体と接触した際に

ボールがとまっているかを確実に確認する。

(3) アンテナ付近の判定

ボールがアンテナに触れたのか、選手がアンテナに触れたのか、どちらのチームが反則になったのか正確に判定ができるようにする。

【副 審】

I 権限と責務

第28条第1項権限、第2項責務を十分理解し、試合の状況を把握して主審を補佐することを意識しながら、自身の責務を遂行する。

- (1) ベンチ（ウォームアップエリアを含む）にいるチームメンバーの不法な行為に対してコントロールし、主審に報告する。
- (2) 記録員の任務をコントロールする。
- (3) サービス順が間違っている場合の手続き、不当な要求、遅延や不法な行為の記録などが完全に行われているかを確認する。
- (4) 第2セット、第3セット開始時に、監督がメンバーの変更等申告のない場合は、監督に速やかに確認を行う。
- (5) 次セットのサービスチームを記録員と協働で確認する。その際は、前のセットの最終サーバーがどちらであったかを記録用紙で必ず確認する。
- (6) プロトコール中、コート競技参加者を構成メンバー表で確認をする。

II 判定について

(1) ネット際の判定

- ① タッチネットの反則は、第21条第3項を理解し、正確に判定をする。特にアタック後にネットの網目の部分に触れる反則が判定できるように目を残す。
- ② 主審にワンタッチのハンドシグナルを送るタイミングは、1本目のレシーブ後である。ハンドシグナルを送るときは、主審と目を合わせる。

(2) アンテナ付近の判定

ボールがアンテナに触れたのか、選手がアンテナに触れたのか、どちらのチームが反則になったのか正確に判定ができるようにする。

(3) 許容空間外側のボール通過の判定

- ① アンテナ付近を通過する許容空間外側の判定では、位置取りを速くし正確に判定できるようにする。
- ② ボールが主審後方の許容空間外側を完全に通過した場合は吹笛する。

(4) 競技中断の手続き

- ① 複数の競技者交代の手続きを1組ずつ正確に行う。（記録員との協働）
交代競技者が準備していないときや、その交代が不法な場合は拒否をして、主審に遅延の手続きをするように合図する。
- ② ゲームの流れを読み、チームの要求に速やかに対応する。
ワンラリー毎にベンチコントロールを行う。
- ③ タイムアウト後、コートに入ることが遅くなるような場合、吹笛とシグナルで促し、繰り返す場合は何回も吹笛して促さずに、遅延の罰則を適用する。

(5) ボールとの接触

主審と同様にボールとプレーヤーの接触回数をカウントし、明らかにオーバータイムスになった場合は、胸の前で主審に補助シグナルを送る。

【記録員】

I 権限と責務

第29条第1項権限、第2項責務を十分理解し、自身の責務を遂行する。

- (1) サービス順および得点の確認を正確に行い、記録をつける。
- (2) 次セットのサービスチームを副審に報告する。
- (3) タイムアウト及び競技者交代を記録し、その回数を副審に報告する。
- (4) 複数の競技者交代の手続きを1組ずつ正確に行う（副審との協働）
記録員は、交代が正規であるならば、必ず副審と目を合わせて片方の手を挙げる。競技者交代の記録を完了した後、副審に両方の手を挙げて、記録が完了したことを報告する。複数の競技者交代の場合は、上記の手続きを繰り返す。
- (5) 記載ミスをした場合は、二重線で消す。主審・副審が確認したときに誤りがあったときは、記録員が修正する。
- (6) プロトコール中、コートของทีม構成員を記録用紙で確認をする。

【線審】

- (1) 担当するラインの判定を確実に行う。ワンタッチは、確実に見えた場合に限りフラッグシグナルを示す。
- (2) アンテナに関わる判定方法を確認し試合に臨む。
- (3) 競技者がアンテナに触れた場合、フラッグを振り競技者を指す。